

教養教育の重要性とコロナ禍における危機

山縣 香奈

「高等教育のあるべき姿」というテーマを聞いたとき、大学院生の立場から等身大の素直な思いを述べたいと思いました。現在、少し状況は良くなってきていますが、それでも新型コロナウイルス感染症の影響で、大学は閉鎖的になっています。オンライン授業が多く、自由にキャンパスを歩くことも、友人とマスクなしに笑い合うことも、議論することも、国内外に飛び出して新しい経験や出会いを得ることもできません。私は学生にとって一番大切なことは教養教育における多様な人々との出会いだと思っているのですが、ここで、私自身の大学生活を振り返ってみたいと思います。

私は、高校生までは東京からは遠いとある地方都市の公立校でずっと教育を受けていました。非常に狭い世界しか知らず、地方特有の学校と家族という小さな社会の中で、考え方や価値観は悲しいほど未熟で狭かったように思います。進学を機に上京し、生まれて初めて東京に住みました。大学では、前期教養課程と後期の専門課程に分かれており、前期教養課程では文理問わず全ての大学1,2年生が同じキャンパスで学び、これまで会ったこともないような全国から集まる多様な人々と出会うことができました。大学3,4年生で主に行われる専門課程はもちろん、大学院で学ぶ上でも必要不可欠な2年間でした。しかしながら、それと同じくらい、いや、それ以上に前期教養課程での学びが忘れられません。

例えば、教育学とは関係ありませんが、イスラーム世界の女性についてのゼミに参加しました。イスラーム圏に頻繁にフィールドワークへ行く教員の話は新鮮で、おしゃれで快活なイスラーム女性の話に驚きました。まわりの学生や、もちろん教員からも様々なことを学びました。研究をするときには、論文や書籍を読むと思い込んでいましたが、古い新聞や手紙といった一次資料を読み解き、鮮やかなプレゼンテーションを行った同級生を目の当たりにし、感銘を受けました。理系の人との議論では、やはり違う視点も多く、話すだけでも刺激を受けました。何気ない会話の中で、「障害って世の中が変われば変わるよ。昔は目が悪かって障害だったけど、いまは眼鏡もコンタクトも手術もある。障害を決めてしまうのは社会だ。」と教員が話したことをずっと覚えているなど、雑談の中での気付きも多くありました。キャンパスに行けば、誰かに会え、話すことができ、どこにでも行けるような気がして、広い世界を見てみたいと色々な場所へせっせと足を運びました。大学に入らなければ、見ることも知ることもできなかった世界、考え方も分からなかった世界、出会えなかった人々と知り合えたことは教養課程のおかげだったと感じています。

改めて「高等教育のあるべき姿」を考えても、真っ先に思い浮かぶのは、大学での多くの人々との出会い、そして教養教育の重要性です。大学という場で、これまでの価値観を広げ、柔軟にし、多様な人々と出会うことこそが人生の中でも非常に重要だと考えます。その上で、自分は大学において何を学びたいのか、社会の中でどのような生き方をしているのかと悩み、決断していくのではないかと思います。そのため、今般の新型コロナウイ

ルス感染症による影響は大学生の生活や学びにとって、想像以上のダメージを与えているのではないのでしょうか。特に、多様な人々と出会うことこそが最大の学びともなる教養教育にとって、その損失は計り知れません。

大学や教員の方々もオンラインを駆使し、学生の学びをサポートしてくださったことに心から感謝しております。学生側もオンラインの便利さを享受し、多くのメリットも感じました。しかしながら、様々な専門分野に進む前に、集まり、議論し、日常の雑談からも得る学びや気づきが制限されてしまうことは、やはり大きな損失だと思っております。オンラインを駆使しつつも、どうやったら損失を抑えられるのかについて皆で考えていかなければならないと思います。

一刻も早く、新型コロナウイルス感染症をめぐる状況が良くなり、日常を取り戻せることを祈り、結びといたします。ご清聴ありがとうございました。